

● 関西大学と月桂冠の共同企画で新発売

「京都水盆」の豊潤な地下水 ミネラルウォーター『自然の秀麗』誕生



関西大学と月桂冠株式会社(大倉治彦取締役社長)が共同で企画したミネラルウォーター『自然の秀麗』が、10月20日に発売された。京都伏見の地下水で、長年にわたり日本酒の仕込水として採水する水だ。今回の共同企画は、関西大学と伏見酒造組合の連携協力協定の締結、さらにさかのぼると楠見晴重学長による京都水盆の広域地下水利用と適正な維持管理システムの構築に関する研究に源を発している。



● 「京都水盆」研究の成果から共同企画へ

京都の地下には、「京都水盆」といわれる多量の地下水が存在している。その良質の水が茶道や友禅染、京料理、豆腐、和菓子などを生んだ。もちろん伏見の酒造りも。その水がミネラルウォーターとして、どこでも飲めるようになった。

楠見学長を中心とする環境都市工学部地盤環境工学研究室は20年以上にわたり、正確な地形・地質や水量の把握に努め、さまざまな調査資料を詳しく分析し、地下構造を精密に推測して計算してきた。3次元的に京都水盆を表すことにも成功した。それにより、京都水盆には琵琶湖の水量(270億トン)に匹敵する約211億トンの地下水が蓄えられていることが分かった。



「京都水盆」の調査・分析に取り組んできた、楠見学長と環境都市工学部地盤環境工学研究室の院生たち(月桂冠大倉記念館)

この研究は2002年にNHKの特集番組で放映され、また、2003年京都で開催された第3回世界水フォーラムでも紹介された。その後も、地下水をコン

ロールする、安全でエコロジカルな都市づくりの研究を続けてきた。

さらに、この研究が基になって2009年12月、関西大学と伏見酒造組合は、地下水の適正利用と環境保全について共同研究していくことなどを盛り込んだ連携協定を締結した。同組合の組合員である月桂冠とのこのたびの共同企画は、関西大学が約450年続いている伏見の酒造りに欠かせない地下水を未来にわたって保全し、京都の代表的な伝統産業を持続させる研究成果の一部である。

● 1200年の都の文化を支えた地下水



「自然の秀麗」というネーミングは、研究に携わる研究室の学生らとミーティングを重ね名づけたもので、関西大学学歌(作詞：服部嘉香、作曲：山田耕筰)の冒頭にも登場する。

味は、くせがなく、まろやかな水(軟水～中硬水)で、そのままはもちろんお茶やコーヒーにも適している。素材の良さを引き立てることから、和の料理にも合う。1200年にわたり都の文化を支えたこの豊潤で良質な地下水と、それを守っていくことの大切さを多くの人に知っていただきたいという思いを込めて、月桂冠から発売されることになった。ペットボトルのデザインもさわやかだ。

発売後は、関西大学のキャンパス内売店、月桂冠大倉記念館、インターネットサイトから購入できる(500ml、定価100円税込)。

● Online Shop 月桂冠
<http://www.rakuten.ne.jp/gold/gekkeikan/>

第30回「地方の時代」映像祭2010

～地域からこの国を問う～

関西大学千里山キャンパスで開催
グランプリ・受賞作品、「名作ドキュメンタリー」上映

関西大学、吹田市、日本放送協会、日本民間放送連盟が共同で開催する「地方の時代」映像祭が、11月20日～26日に千里山キャンパスで開催された。今年は第30回の節目にあたり、グランプリ受賞作品の上映のほか、映画監督の河瀬直美氏による記念講演、「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会などもあり、多数の市民と学生が参加した。



5月12日に行われた、「地方の時代」映像祭実行委員会の記者会見



▲第30回「地方の時代」映像祭2010告知ポスター

● 地域・地方から映像で問い続けた30年

「地方の時代」映像祭は、1980年にスタートした。神奈川県川崎市で開催された第1回映像祭には、全国の放送局と自治体から105の作品が寄せられ、放送現場と自治の現場との交流がはかられた。翌年の第2回の映像祭から、「映像コンクール」が中心の企画になり、放送局、自治体、市民から、地域を描き、時代を語る意欲的な映像作品の応募が増えてきた。

以来30年、映像祭の舞台は当初の22年間が川崎市(札幌、長野、富山で各1回)、2003年から川崎市、そして2007年から吹田市へと移ったが、「地域・地方からわが国のあり方を問う」という基本テーマは揺らぐことなく維持されている。

この30年間に、全国各地から映像祭に寄せられた応募作品は優に3000を超える。今回は「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会も催された。中央・極集中がますます進みつつある現在、新たな30年に向かう「地方の時代」映像祭の果たす役割は重要度を増している。

● グランプリは「笑ってさよなら～四畳半下請け工場の日々～」

第30回「地方の時代」映像祭2010は、「地域からこの国を問う」をテーマに掲げて、千里山キャンパス内で開催された。

11月20日に、贈賞式、30周年記念講演(河瀬直美氏)、グラン

プリ受賞作品上映、シンポジウムなどが行われた。21日にはワークショップがあり、22日から26日にかけて、今回の受賞作品およびミニネート作品の上映会が開かれた。また「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会も併催された。

応募作品は、放送局部門、ケーブルテレビ部門、市民・学生・自治体部門、高校生部門に分かれて審査される。各部門ごとに優秀賞、奨励賞があり、共通してグランプリ(賞金100万円)1点が選ばれる。今年の審査委員は、辻一郎(ジャーナリスト)、河野尚行(元NHK放送総局長)、後藤正治(作家・神戸夙川学院大学教授)、佐藤友美子(財団法人サントリー文化財団首席研究フェロー)、橋本佳子(映像プロデューサー)、森達也(映画監督・作家)、結城登美雄(民俗研究家)、吉岡至(関西大学教授)の各氏。

一次・二次・最終審査を経て決まった今年のグランプリは、放送局部門の「笑ってさよなら～四畳半下請け工場の日々～」(中部日本放送)。名古屋市内の零細工場の閉鎖に至る半年間、働く人の姿と「笑い声」を通じて、自動車産業を支えてきた地域の今を描いている。

審査員からは「小さな町工場で働く3人の主婦たちの姿を明るく描きながら第4次下請けの厳しい現状、大不況の時代をたくみに伝えている」、「工場は閉鎖となったが、主婦たちの明るさ、たくましが印象的で、『地方の時代』映像祭に相応しい受賞作」と評価された。